

審査の結果の要旨

氏名 松田なつみ

半随意的な運動及び音声チックを主症状とするトゥレット症候群（Tourette Syndrome）では症状に前駆衝動が伴う。そのため患者は、症状出現を事前に察知し、症状コントロールに向けて自己対処することが多い。しかし、その対処内容や効果についての詳細は検討されていない。そこで本論文は、自己対処の実態を把握し、自己対処の前提となるチックの性質を理解した上で、効果的な自己対処について論じることを目的とした。第Ⅰ部では、第1章でチック症状の性質と対処に関する先行研究をレビューし、自己対処を包括的に理解して、それを治療につなぐ意義を検討し、第2章において論文の研究課題を示した。

第Ⅱ部では、第3章で患者103名の質問紙調査によって、チックへの抑制的対処が日常的になされており、その満足度が患者の生活の質に影響を与えることを示し、第4章で患者21名の半構造化面接の語りを質的に分析し、自己対処のあり方を6分類するモデルを生成し、肯定的効果と否定的影響の両面から自己対処の実態を把握した。

第Ⅲ部では、第5章において患者16名の半構造化面接の語りの質的分析から、統制感と諦念の相補的な獲得によって対処への圧力と限界の折り合いをつける自己対処の文脈形成の可能性を示し、第6章で患者97名に質問紙調査を行い、17歳以下では受容的対処が生活満足度に、18歳以上ではチックへの過敏さの低さと体調管理が生活の質の向上に寄与することを示し、自己対処が効果的となる文脈を明らかにした。

第Ⅳ部では前駆衝動とチックの関連性を検討した。第7章で母指圧計と皮膚電位計を用いたビデオ録画による患者8名の観察研究によって、前駆衝動はチックと共起関係にあり、チック後も急減するわけでないこと、強迫症状がチック生起時の緊張感と前駆衝動を強める可能性があることを示した。また第8章では、患者10名に一定時間チックの抑制を求めるABAB法の行動実験を行い、抑制によって前駆衝動が上昇するわけではないことを示した。さらに第9章では、神経心理検査を用いて患者33名と健常者18名に認知機能の比較を行い、トゥレット症候群特有の強迫症状が認知の柔軟性の低さと関連することを示した。

第Ⅴ部では、第10章で患者82名の横断調査により前駆衝動の生活への影響は強迫症状によって強められることを示し、第11章で患者10名を対象とした前駆衝動への注目を求めるABAB法の行動実験により、強迫症状が重症である場合を除いて前駆衝動への注目はチックの悪化につながらないことを示し、前駆衝動への注目の影響について明らかにした。

最後に第Ⅵ部第12章において研究結果を総括した。本論文は、チックの自己対処の実態を把握し、その有効性と限界を具体的に明らかにした研究である。チックの半随意性と患者の注意のあり方に焦点を当て症状の維持・悪化に関する認知・行動モデルを提示し、患者の自己対処をより有効なものにする臨床的示唆をもたらした点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。